

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

1. マンガとの出会い



ネット配信版・新つれづれ草に掲載の「マンガと生きた50年」は、東京都江東区・森下文化センターにて2017年10月20日(金)から29日(日)の会期で開催しました。新つれづれ草マンガ展「篠原幸雄からやましたゆきおへ マンガと生きた50年」で展示した展示物を再構成したものです。

おやじマンガ同人誌

つ新つれづれ草

マンガ展

篠原幸雄からやましたゆきおへ

マンガと生きた50年

おやじマンガ同人誌「新つれづれ草」の山下幸雄は1970年少年ジャンプから篠原幸雄としてマンガ家デビューその後、マンガ家、デザイナー、編集者としての立場を変えながらマンガとの関わりを持ち続けて生きてきた。そして今再び、やましたゆきおとしてマンガを描き始めた！

入場：無料

イオスタ・豊原中道
(豊原少年センターの隣裏、旧けすの穴五)

日時：10月20日(金)～10月29日(日)
午前9時より午後9時まで(最終日は午後5時まで)

会場：森下文化センター1F展示ロビー

お問合せ：森下文化センター
〒135-0004 東京都江東区森下3-12-17
TEL03-5600-8666 FAX03-5600-8677
都営地下鉄新宿線・大江戸線「森下」駅A6出口より徒歩8分
都営大江戸線・東武メトロ半蔵門線「清澄白河」駅A2出口より徒歩8分
<http://www.kcf.or.jp/>

主催・新つれづれ草 共催・森下文化センター







1、マンガとの出会い

図工は得意でした。小学校のときはずっと成績は5で、まわりからも「上手だね」と言われるし、本人もその気になっていました。でも、絵だけは嫌いで、うまく描けたと思ったためしなかったなあ。

中学上がるまで、ほとんどマンガは読まなかったですね。近所に友達がいなかったし、家でも兄が持っていたマンガを読んだ記憶はなくはないけど、それも頻繁にあっただけではなかったですね。

文・新つれづれ草第7号掲載

「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆

青春の条件 エピソード5 やましたゆきお





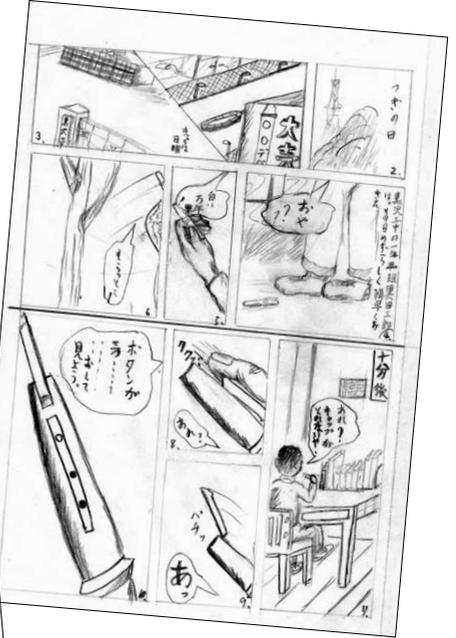
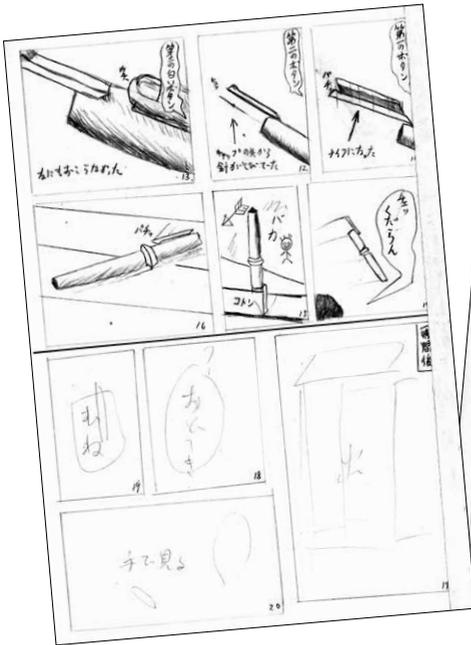
マンガを描ききっかけになったのは、中学のときのクラスメートが小説を書いてきて、そのことを自慢げに話しているのを見て、自分も書こうと。でも小説なんか書けないので、マンガなら描けるかなと思ったのが最初です。

文・新つれづれ草第7号掲載
「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆



マンガ・新つれづれ草第6号掲載「青春の条件エピソード5」より抜粋

ノートに鉛筆で描いたマンガ。

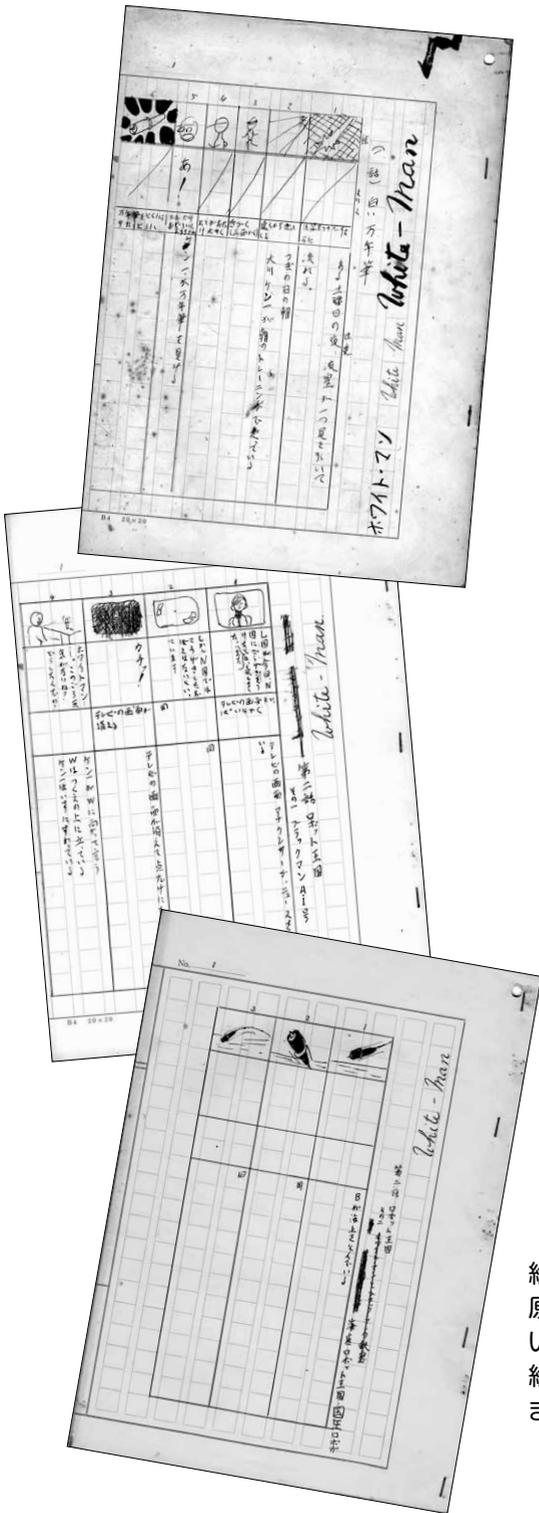


ただ、自分で描けるほどマンガを読んではなかったし、描き方もわからない。だからシナリオのようなものを書きました。

どこかの星の王子が地球にやってきて、お姉さんが敵に捕まってそれを助けに行くというSFストーリーです。それで、そのシナリオに絵を付けたんです。今思うと絵コンテみたいなのだったかな。

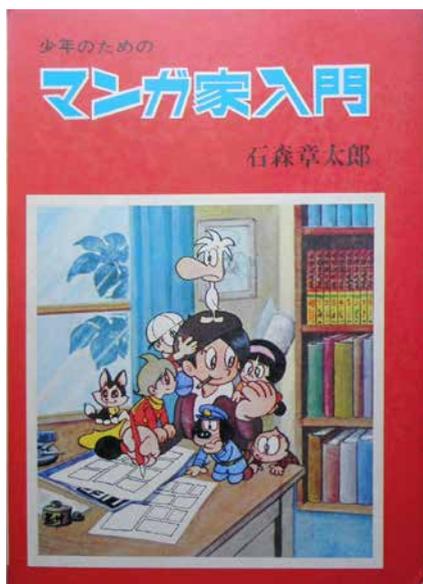
文・新つれづれ草第7号掲載
「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆

絵が描けないことに気がついて、原稿用紙にシナリオ風にお話を書いて、それに絵を付け、アニメの絵コンテの様なもので、思いつくままに、ストーリーを書き続けた



ちゃんとしたマンガを描くようになったのは、手塚治虫(冒険王編集部編)の「マンガのかきかた」と石森章太郎の「マンガ家入門」を読んでからです。墨汁で描くとか、模造紙を使うとかを覚えて。それまで描いたシナリオをマンガに描き換えていったんです。

文・新つれづれ草第7号掲載
「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆



「マンガ家入門」石森章太郎著、
秋田書店刊



「マンガのかきかた」
冒険王編集部編、秋田書店刊

初めてマンガを投稿したのは、「鉄腕アトムクラブ」という虫プロのファンクラブの機関誌です。『ホワイトマン』という最初に描いたマンガがすでに百ページくらいになっていたので、それと『SとM』というSFの短編マンガを送りました。『SとM』のほうが選外佳作で掲載されました。すごく嬉しかったです。原稿は戻ってこなかった。

文・新つれづれ草第7号掲載
「つれづれインタビューマンガびと」より抜粋加筆



鉄腕アトムクラブ 22号、
昭和41年5月1日発行号の
投稿コーナーに掲載された



虫プロダクション友の会の会報誌
「鉄腕アトムクラブ」
その後「COM」に発展解消する